



Title	献辞
Author(s)	井上, 久志
Citation	経済學研究, 57(4), vi-vii
Issue Date	2008-03-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32391
Type	bulletin (article)
File Information	ES57(4)_vi-vii.pdf



[Instructions for use](#)

献辞

関口恭毅教授は、2008年3月31日付けをもって定年退職される。教授は永年にわたり本学部の学生、大学院生の教育及び研究指導にあたられるとともに、多くの研究成果を挙げられ、北海道大学とわが大学院経済学研究科・経済学部のために多大の貢献をなされた。この功績に報いるため、本誌を教授の退任記念号として献呈することにした。

教授は1967年に北海道大学工学部の卒業と同時に、同大学院工学研究科修士課程に進学され、引き続き1969年には同研究科博士課程へと進まれた。大学院では精密工学科自動制御講座で三浦良一教授の薫陶を受けられ、修士課程在学中は数値制御工作機械の適応制御の研究を、博士課程においては、直列型生産工程のスケジューリング理論の研究をされた。1972年3月「フロー・ショップの解析並びにスケジューリング問題の解法に関する研究」に対して工学博士号を授与された。

博士課程修了後は日立製作所に入社され、生産技術研究所において、生産システムの研究に従事され、スケジューリング理論ならびにシステム工学の応用的研究に携わっておられたが、本学大学院経済学研究科に経営学専攻（修士課程）が設置される直前の1975年9月に、迎えられて北海道大学経済学部助教授として着任され、その後1988年7月に教授に昇任された。

本学赴任後は経済学部、大学院経済学研究科において管理工学の授業科目を担当され、大学院重点化後は情報分析および経営情報学の授業科目を担当された。教授は今日までの32年余の永きにわたり、その豊富な学識経験と高い見識とをもって、学部学生、大学院学生の教育、研究指導にあたられ、200人を越える、優れた人材を世に送り出されている。

この間、1985年8月からの1年間はフルブライト奨学生として米国ペンシルバニア大学ワートン校に、また、1995年9月からの10ヶ月間は文部省在外研究員として米国ワシントン大学（シアトル）、ピッツバーグ大学、および、英国ロンドン・ビジネス・スクールに、それぞれ客員研究員として滞在された。

関口恭毅教授のこれまでの研究を概観すれば、以下のように要約できる。

第一に、1985年頃までは、「組合せ最適化問題の理論と解法アルゴリズム」をテーマに研究された。特に、フロー・ショップ問題の一般化理論を志向して、ジョンソンの定理およびシドニーの分割定理の一般化を行うと共にその成立する問題領域を規定する一般的条件を明らかにした。その代表的な研究成果は、“Optimal Schedule in a GT-Type Flow-Shop under Series-Parallel Precedence Constraints,” *Journal of the Operations Research Society of Japan* (1983) や “A Decomposition Theory Based on a Dominance Relation and Composite Jobs,” *Discrete Applied Mathematics* (1987) として発表された。組合せ最適化問題の一般的構造の解析にも当たられ、“A Note on Node Packing Polytopes on Hypergraphs,” *OR Letters* (1983) は、その成果の代表的なものである。また、組合せ最適化の解法アルゴリズムの一般的フレームワークを構築・分析し、その成果を “A Unifying Framework of Combinatorial Optimization Algorithms; Tree Programming and Its Validity,” *Journal of the Operations Research Society of Japan* (1981) として公表された。

第二に、ペンシルバニア大学留学から帰国した後から1995年頃までの研究の中心は、「第4世代言語を利用する組合せ最適化意思決定支援システムの開発研究」であった。この時期の研究は、CAMP と呼ばれる組合せ最適化アルゴリズム設計支援システムに結実し、日本オペレー

シヨonz・リサーチ学会 事例研究奨励賞（1992年）を受賞すると共に“Computational Environments for Operations Research: Classification and a Pioneer System,” *International Transactions in Operational Research* (1994)として発表された。これらの研究は意思決定を支援する情報のユーザフレンドリーな提供を志向したものであった。

第三の研究は、この方向をさらに一般化したもので「情報品質保証に関する研究」である。意思決定者の実務的問題認識と数理的問題認識のギャップを埋め意思決定支援の情報品質を高める一方法として、オブジェクト指向の問題記述様式 GERM を提案しその有効性を明らかにした（「実体－関連概念の拡張によるスケジューリング問題記述の特徴と応用」『日本オペレーションズ・リサーチ学会和文論文誌』, 2005年）。また、経営情報システムが提供する情報の品質を測定・評価することによって、利用者の評価を情報システムの継続的改善に活用することが可能なことを示した。

第四に、関口教授は以上のような学術的理論的な解明を目指すに止まらず、実践的な応用研究も志向された。着地観光の観光メニューの選択と観光プラン作成に数理計画手法を応用する方法を考案し、従来にない観光情報案内をインターネット上に実現した研究は、共同研究者との共著で「Quality 旅 Net 構想とその実現に向けての現状と課題」観光情報学会誌『観光と情報』(2006)として公表されている。

以上のような教育・研究面における多大な貢献にとどまらず、学内では以下のように本学運営の枢軸に参画されると共に、経済学研究科および経済学部の管理運営に尽力された。評議員あるいは教育研究評議員（1997年8月から2001年7月, 2003年8月から2004年3月, 2004年8月から今日まで）、体育指導センター所長（1999年から2003年）、経済学研究科副研究科長（2004年8月から今日まで）、経済学研究科経営情報専攻主任（2001年4月から2003年3月, 2004年4月から2005年3月）、経済学部経営学科長（2002年4月から2003年3月, 2004年4月から2005年3月）の要職を務められた。

また、大型計算機センター、情報処理教育センター、体育指導センター、ベンチャービジネス・ラボラトリー、北海道大学情報ネットワークシステム（HINES）の各運営委員会委員として活躍し、特に、HINESの利用専門委員会委員長として、HINES憲章の策定にあたられた。さらに、学生の課外活動の健全育成にも尽力され、1981年から25年間もの永きにわたって北海道大学陸上競技部部長を務められたことは特筆に値する。

他方、学外においても、学会の運営については、日本オペレーションズ・リサーチ学会、日本情報経営学会、経営情報学会、スケジューリング学会、観光情報学会等の理事、評議員、北海道支部長などを歴任され、学術の発展に力を注がれた。特に、日本オペレーションズ・リサーチ学会からは長年の研究並びに学会運営への貢献にたいしてフェローの称号を授与されている。

このように同氏は、研究者として優れた業績を挙げられ学術の発展・振興に寄与されたほか、教育者としても優秀な人材を数多く世に送り出され、また、大学行政に多大の貢献をなされたばかりか、社会や地域の発展に関する多数の公職も歴任され、その功績はまことに顕著なものがあると認められる。

教授が定年を迎えられ、本学を去られることは惜別の念にたえない。いまは、ただ、これまでも増す学問上のご活躍を祈念するのみである。

2008年3月

北海道大学大学院経済学研究科長 井上久志